

# むかし ふう 昔風のクリスマス

「ヘレン！ ヘレン！」

ヘレンとは、私のことだ。母が私を呼んでいる。母の声を聞いて、私はベッドから飛び起きた。寝坊してしまっただ。牛の乳しぼりやめんどりのエサやりなどの雑用は、気分が乗っていようがいまいが、やらねばならない。

私は頭を振ると、あっという間に昇ってきた太陽をいぶかしげに見た。顔を洗いながら、頭の中はまるで加算器のようにカチカチ音を立てて回りながら、弟や妹達が目を覚ます前に、すべての雑用を終わらせられるか計算していた。

何とかうまくいきそうだ。母はいつも、私には管理能力があると誇りに思っていた。

「食事ができたわよ！」と呼ぶ母の声で、私は乳しぼり用の椅子から立ち上がり、指の筋肉をほぐした。椅子を片付けると、牛乳の入ったバケツを持って、家畜小屋を出た。

私達の家は、ロアノーク川が見える5エーカーの

土地に建っており、晴れた日には、ブルーリッジ山脈まで見渡すことができる。夏には、松の木や草がいい香りを放つ。私は深く息を吸って、朝の空気を味わいながら、がんじょうに建てられた私達の家に向かった。今は、朝食のことしか頭がない。

朝食の席に着き、父が私に「誕生日おめでとう」と言うと、残りの全員が一斉に「おめでとう」と言ってくれた。食べ応えのある朝食で、みんな満腹した。父は、母が毎日「魚とパン」の奇跡をしていると言う。そうでもなければ、どうしてこんなに少ない食べ物がこれほど美味しく、かつみんなに十分行き渡るのか、理解できないと言うのだ。

私の手がずっと動き、私のお皿に真っすぐ伸びてきた小さな手をすかさずつかまえた。弟のトロイだ。つかまると、ものすごく後ろめたそうな顔をした。が、目がキラリと光った。他の子供達が一斉にクスクス笑ったので、トロイに気を取られている間にヘクターが私のお皿から何かをさっとくすねたと分かった。

「さあさあ、落ち着いて。」父がそう言うと、7人全員が静かになった。ヘクターはウインクして、私のパンを返した。



「誕生日おめでとう、ヘレン。」母が済まなそうな声で言った。

誕生日ではあっても、プレゼントなど特別な物は何も両親に期待していなかった。

私は母をだきしめて言った。「プレゼントのことなんか、気にしないでね。私はもう、プレゼントをもらうほど子供じゃないんだもの。」私は思いっきり大きな笑顔を見せた。別に、嘘ではない。12歳になれば、プレゼントはもう必要ないと、私は自分に言い聞かせていた。私達のように貧しい家庭なら、なおさらだ。

「まるであごが四角くなりそうよ。」母がそう言って、からかった。私が何か思い込むと、顔の形が変わるといふ冗談だ。

その日、私は用事で町に出た。母は、私が町に行くのを楽しみにしていることを知っていたし、家での日課の雑用から離れるいい機会だと思って私に頼んだのだろう。

町に着くまでの5キロほどの道中、私には少しばかり考えることがあった。

私達みたいにせつせと働く一家がこんなに貧しいなんて。全く不公平ではないか？ 12歳になった時ヘクターがプレゼントらしい物をもらえるように、私にできることが何かあるはずだ。何か方法があるにちがいない……。

私達のつぎはぎだらけの服や、修繕が必要な家の屋根や、すり減ったトロイとヘクターの靴底なんかのことが思い浮かぶ。私も、是非欲しいと思っている詩の本がある。

町に着き、母に頼まれた物を買った後は、地元の出來事について情報を仕入れようと、少し歩き回った。カーニー鍛冶屋に寄った際には、最近イギリスから移住してきた人達が、先週出來上がったばかりのお屋敷に入ったことを耳にした。ただじっと静かに立っているだけで入って来る情報にはびっくりさせられる。

「未亡人のホイットフィールドさんが、弟さんといっしょに引っ越して来たらしいよ。」と、カーニーさんは言った。

その邸宅を見たことはなかった。母が夕食の準備を

するのを手伝う前に少し空いた時間があるので、私は新築の立派なお屋敷を見に行くことにした。

少なくとも5分ほどは、ぼうぜんとながめていたであらうか。その邸宅は、立派どころではなかった！ 豪邸なのだ！ 正門の両側の柱は、優雅な白い大理石でできていた。そして、イギリスから持ち込んだに違いないバラの茂みが、家の周りに張り巡らされた柵をおおっていた。1階と2階の窓は幅広く高いアーチ形で、壁は暖色の赤いレンガ造りだった。

少しずつ門のそばに引き寄せられていたことに、自分でも気が付かなかった。馬車がすぐそばで止まったので、私ははっと我に返り、驚いて思わず身を後ろに引いた。立派な馬車からは、黒ずくめのか弱そうな婦人が降りてきた。

彼女は私に気が付くと、まるで、今までに近くで子供を見たことがないかのように、額に少ししわを寄せた。

「まあ。何かご用かしら？」と彼女は言った。

50代だろうか。彼女は悲しそうな茶色い目をしていた。英国なまりのやわらかい口調だった。私は、彼女と馬車と豪邸を見て、平常心を失う前に、興奮して言った。「奥様。お宅を拝見していました……

こんなに大きなお屋敷をピカピカ状態に維持するには、お手伝いが必要でしょうね。私なら、何でもお掃除できますよ。料理のお手伝いもできるし、使い走りもできます。庭仕事も多少できます。鶏の世話もできますし……もし鶏など飼っていただければの話ですが。何でもお手伝いできますよ。」

そう言うと、私は深く息を吸った。最後まで言う前にさえぎられるのがこわくて、一気に話したからだ。



かのじよ わたし あたま  
彼女は私を頭のとっぺんからつま先まで見て、くち  
びるを結んだ。おこっているのではなく、何かを深く  
かんが 考えている様子だった。

「おじょうさん、お名前は？」

「ヘレン・サウジーです。」

「あすの2時にいらっしゃい。その時に話しましよ  
う。」と彼女は言った。

かのじよ わたし えしやく  
彼女は私に会釈すると、家の中に入って行った。

わたし おも  
私は思った。(ヘレン。自分でもびっくりだったけど、  
それと同じくらい、あの女の人も驚いていたわ。)

わたし きぼう  
私は希望とこわさが混じった気持ちで、町へ出て  
きた時と同じくらい、帰り道もずっと考え事をして  
いた。

そういう訳で、私はテランスが私の背中をすべり  
落ちるまで、その存在に気が付かなかった。テランスは、  
大人しく物静かでひかえめな・・・カエルなのだ。  
私の服の中にいたくはなかったはずで、それは私だって  
同じだ。兄のアギーが背中からテランスを引き出して  
くれるまで、私は必死にもがいた。そもそも、私の  
背後にそうっと回って背中にテランスを入れたのは、  
アギーなのだ。

アギーは、まるで生まれたばかりの子羊のように  
無邪気な目で私を見た。私は最初憤慨し過ぎて言う  
ことばもなかったが、やがて怒りの言葉が心に湧き  
上がり、ついに堪忍袋の緒が切れた。

「こんなの、お兄ちゃんのやることじゃないでしょ！」

「えっ？ だれのこと？」

わたし かえ  
私はあきれ返った。

「もう、一体・・・」

アギーは私が何も言わないように、タフィーを取り  
出して私にくれた。

「そんなものくれたって、私がおこるの止めた訳じゃ  
ないからね。」私は片手でタフィーを受け取り、もう  
片方の手を兄の目の前で振りながら言った。

「そうなの？」アギーはしょげ返って見せた。それ  
から私達は大笑いしながら、家まで帰った。

家に着くころには、テランスの件はきれいさっぱり  
わすれていた。私は真っすぐ母の所へ行って、明日の2時、  
ひとあやくそくはな  
人に会う約束ができたいきさつを話した。

「なんてこと！ よくもまあ、そんなことを言う度胸が

あったわね！」母はびっくり仰天してそう言ったが、  
内心私のことをちょっぴり誇らしげに思っているよう  
でもあった。

アギーでさえもが、まるで別人を見るような眼差しで  
私を見た。

夕食の後、母と父は、私があのお大きな家で働くことに  
ついて話し合った。うれしいことに、少なくともホイット





フィールドさんが私を雇ってくれるかどうかを見てみようということになった。アギーは私に付き添うようにと言われて、まるで鶏小屋に侵入したずる賢いキツネのように喜んでいて。テランスを川に戻して来なさいと父に言われても、素直に聞き入れたほどだ。



翌日、私は緊張のあまり、あんなことをホイットフィールドさんに言うなんて、思いつかなければ良かったのと思うほどだった。ありがたいことに、アギーはそばにいて、冗談を言ったりして、私の緊張を解きほぐしてくれた。ホイットフィールドさんの家に着くまで、馬車道を歩きながら、ずっとひょうきんに振る舞っていてくれた。そして、私が野鳥のごとくビクビクしていたことを思い出さない内に、家の扉が開き、執事が私達を居間に案内してくれた。

ホイットフィールドさんは、いくぶんほほ笑みを浮かべながら部屋に入って来た。昨日ほどはこわばっていないようだ。彼女も座って、いっしょにお茶を飲んだ。

「ご家族は大勢いるの？」

「はい。両親を入れて、9人家族です。」

「おやまあ！」彼女はびっくりしていた。しばらくすると言った。「お父様のお仕事は？」

「父は製材所で働いています。私達は農場に住んでいます。」

「あなたが一番年長なのかしら？」

「一番上は兄のアギーで、15歳です。」そう言って、私はアギーの方を見た。すると、緊張感が私からアギーに乗り移ったようだった。アギーは、まるで関節もなくなってしまったかのように、背筋をピンと伸ばした。

私は話し続けた。「私は二番目です。私の次がトロイとヘクター、そして双子のペネロープとヘラ、そして一番下がユリシーズです。」

すると、彼女の表情がほころんで、やがて満面笑顔になった。まるで、完璧なおばあちゃん役になったように見えた。

「お父様はきっと、ホメロスの愛読家なのね。」

私にはそれがどういう意味か、分からなかった。

彼女はまたほほ笑んで言った。「仕事について考えてみたのだけれど、実のところ、うちの家政婦には、掃除や料理や雑用を手伝ってくれる人が必要だったの。もし月曜日から木曜日まで、朝の10時から夕方5時まで来ていただけるのなら、〇〇ドルをお支払いするわ。」まだ12歳の私には、身に余るほどの額

だった。

「はい、よろしくお願ひします！」私は喜びのあまり声高にそう言って、手を差し出した。

ホイットフィールドさんは握手に慣れていないようで、一瞬ためらったけれど、またもやおばあちゃんらしいほほ笑みになって、私とかたい握手を交わした。

それから彼女はアギーの方を向いた。アギーは以前よりも更にあり得ないくらいに体をこわばらせた。

「イギリスにいる馬丁（馬の世話をする人）が来るまで、何か月か、馬屋の仕事を手伝ってくれる人が必要なけれど、どうかしら？」

「えっ・・・も、もちろんやります！」アギーは興奮して答えた。

その後少しおしゃべりして、私達はまた握手を交わし、それから家へ帰った。私はまるで宙を舞うような気分だった。アギーは半時間程、まるでブリキの兵隊のように歩いていた。



翌週の月曜日から、私達は働き始めた。ホイットフィールドさんは私を家政婦のアデルさんに紹介した。アデルさんはイギリスで20年以上もホイット

フィールドさんのために働いてきた人で、海を渡ってこの新しい家でも働いてくれるほど、ホイットフィールドさんを慕っていた。

アデルさんは、背が高くがっちりした体格だった。淡い色の髪は、頭上でひとまとめにして大きなピンで留められていた。彼女は、私のきちんと継ぎはぎされた服を食い入るように見つめ、まるで板に張り付いた虫でも見るかのように、頭のとっぺんからつま先までながめた。ちゃんと顔を洗って、爪もいつもより入念にきれいにしておいて良かった。絶対に見られていただろうから。それに、私がちゃんと耳の後ろ側も洗っているかを知る方法だって心得ているんだろう。

彼女は言った。「仕事する時は、このエプロンを付けて、この帽子をかぶる事。家の中には泥を持ち込まない事。窓や鏡には、指紋を付けない事。動物を家の中に入れない事。そして、汚れた手でカーテンを触らない事。」

私は少々いら立ったが、私がそんなことをするはずがないことを、この家政婦が知る由もなく、それに気付くと、おかしくさえ思えた。

「はい、もちろん、そのようなことは心得ております。」私はできる限り真面目な顔をして答えた。

このお屋敷で、先に述べたような恐ろしい事を私がする訳などないと信頼してもらうには、1週間かかった。それまでの間、彼女はしつこいほどに、常に私を肩越しに監視していた。最初の週は、とても簡単な仕事だった。お血洗いに暖炉の掃除、薪の補充、草取りなど。ホイットフィールドさんはあまり見かけなかったが、たまたま会った時にはほほ笑んで、仕事はうまくいっているかなどとたずねた。

2週目には、奇跡が起こった。庭の草取りを終えて家の中に入ろうとしていると、アデルさんがこちらに向かって走って来るのが横目に見えた。家の中に泥を持ち込まないように注意するつもりだろう。私は落ちて着いて、靴底に付いた泥を落とすために用意されていた棒で泥を落とし、固唾をのんだ。アデルさんは立ち止まって、口角をひきつらせた。ほほ笑んでいるつもりなのだろう。それから向きを変えると、家の向こう側に戻って行った。それ以来、私の周囲をうろついて監視することはなくなった。

彼女は何も言わなかったが、彼女の行動で、私を信頼していることが分かった。

そのころまでには、他の使用人の人達とも知り合いになった。執事のジェニングスさんに、料理人のローズさん、それに、ホイットフィールドさんが「フットマン」と呼んでいる、ここそこで仕事をする2、3人の人達。どうしてその人達が「フットマン」と呼ば

れるのかは分からない。彼らはいわゆる「何でも屋」みたいな人達なのだ。「フットマン」とは、何だか立派な名前に聞こえるけれどね。

2週目には、ホイットフィールドさんの弟さんにも会った。背の高いトマトの木の列と、更に高いトウモロコシの列の間を歩いていた時、私は危うく、うつ伏せに寝っ転がっていた男の人につまずきそうになった。もうちょっとで悲鳴を上げるところだった。

落ち着きを取り戻すと、私はやっこのことと言った。「旦那様？ だいじょうぶですか？」

その人は私を見ると、ひじを付いて顔を上げた。「何だい？ 大丈夫かって？ もちろん、全くもって大丈夫ですよ。」そう言うと、ゆっくり立ち上がった。ホイットフィールドさんとそっくりだ。ただし、目だけは、いたずらっぽく輝いていた。

「何度かおじょうさんのことはお見かけしてりましたが、正式な紹介にあがったことはありませんね。私は、ハリス・フェザーリントンといいます。長ったらしい名前ですな。」

「確かに長いお名前ですね。」私も認めた。

「おじょうさんのお名前は？」

「ヘレン・サウジーと申します。」

「それはまた、気の利いた、それでいてすてきな名前だ。おじょうさんに1つ、お願いがあるのだが。私はもう、みんなにフェザーリントンと呼ばれるのがいやになってな。ハリスと呼んでもらえるかね？ ハリーおじさんでも構わんよ。」

「分かりました、ハリスさん。」

「素晴らしい！」彼は声高にそう言うと、とても親しげにおじぎして、大またで家の中に入って行った。

私は草取りを続けたが、どうしてハリスさんが地面に寝そべっていたのか、さっぱり分からなかった。家の中に戻ると、さっき見たことをアデルさんに話し、彼が一体何をしていたと思うかたずねた。

「地面に寝そべっていたですって？」アデルさんは舌打ちをした。「また服が台無しだわ。汚れを落とすのに、どれだけ時間がかかることか。」

「でも、一体何をしていたんでしょうか？」私はまたたずねた。

「私も1度聞いてみたのよ。だけど、何を言っているのか、ちっとも分からなかったの。今度また畑か裏庭で地面に寝っ転がっているのを見かけたら、たずねて

みるといいわ。それと、服は全部、シミと穴だらけですよって、伝えておいてくれるかしら。」

そう言うと、アデルさんはフンと鼻を鳴らして、仕事に戻って行った。

翌月は、とても忙しかった。ホイットフィールドさんと同じくイギリスから移住してきた友人が何人も立ち寄ったからだ。それは、料理もお皿洗いも洗濯も増えることを意味していた。ただ、ほこり掃除だけは少し減った。



このころ、私はアデルさんと親しくなった。やる事がものすごくたくさんあったので、アデルさんとホイットフィールドさんは私に、より幅広い仕事を頼むようになった。食料雑貨店への買い出しや、銀食器をみがいたり、2階の寝室を掃除するなどだ。アデルさんはまもなく、私を「サウジーさん」ではなく「ヘレン」と呼ぶようになった。そして私にも、彼女を単に「アデルさん」と呼んでと言った。次に私が畑で寝そべっているハリスさんを目撃したのは、9月の初めごろだった。今回は、イチゴ畑のそばだった。

「こんにちは、ハリスさん。何をしていたらっしゃるのですか？」

「やあ、こんにちは、サウジーさん。私は、実に興味を

そそられる、マーミコロジーの仕事に夢中でしてね。」

確かに、アデルさんが言っていた通りだ。たった今、ハリスさんが何と言ったのか、私にも全く分からない。「マ・・・マーミ・・・？ それって、何なんですか？」

「よくたずねてくれたね。マーミコロジーとは、アリの学のことだ。つまり、アリの研究をすることだよ。アリの研究をする人は、マーミコロジスト（アリ学者）というんだ。」





「そうなんですか。」私はためらいがちに答えた。ハリスさんはひざを付いて、小さな盛り土に虫メガネを向け、熱心にのぞき込みながら、話し続けた。「私は、ここにあるアリ塚が、全く新しいアリの巣の出入り口なのか、それとも、トウモロコシとトマトの間にあるアリ塚の裏口なのかどうかを突き止めようとして

「はい？」私は返事した。

「よろしかったら、この虫メガネを持って下さらんか？ そうそう！ それで結構です。」

ハリスさんは試験管で、素早く小さな黒アリをすくってつかまえた。コルクでふたをすると、私の方を見て言った。「手伝って下さって、ありがとう、サウジーさん。」彼はハンカチを出して額をぬぐった。

次の2か月ほどは、ハリスさんのこのような研究を何度も手伝った。それで、11月の半ばごろまでには、畑の地下に住んでいるアリの巣については、何でも知っていた。私は、聖書の時代にソロモン王も、アリについて研究し、観察したことを箴言に書いていたことを知った。今では、つかかえずに「マーミコロジー」と言えるようになった。アデルさんにも、アリの生態やその神秘を、納得のいくまで説明した。

他の仕事でも、私は超多忙だった。イギリスからまともやお客さんが何人も来て、新年まで滞在することになっていたからだ。

お屋敷での私の仕事は順調だったが、自宅の方は、ずっと大変な状況だった。製材所での仕事がかかり減ったことで、父は定職を失ったからだ。それに、今年は霜が早く降りて、晩秋の収穫物の大部分が被害を被ってしまった。アギーと私には仕事があったが、大人ほどの賃金はもらえなかったので、年末近くなると、暮らしは細々とやっていくしかなかった。だが、私は「単に細々と」暮らすのはいやだった。それで、かなり落ち込んでしまった。アギーと私に仕事が見つかった代わりに父の仕事が減ったなんて、やるせない気持ちだった。私は、飾りでいっぱいの子供たちを迎えなかった。みんなにプレゼントがあり、自由に使えるお小づかいも少しずつあったらなあと思っていた。私はため息をつくとき、仕事に戻った。



クリスマス前の最後の仕事の日、家を出る時は、スパイスやらのいいにおいが家に立ち込めていた。母は双子のトロイとヘクターに、アップルパイ用のりんごを切るのを手伝わせていた。去年、この二人はクッキーの種に入れるあらゆるものに手を出し、全部混ぜ合わせるまではベーキングパウダーや小麦粉がおいしくないことを知った。それより年下の子供達は外に出て、雪で遊んでいた。

「お母さん、行ってきます。」そう言うと、アギーと私は仕事に出かけた。母はほほ笑んで、小麦粉だらけの手を振った。「お母さん、すぐくつかれているみたい。」雪を踏んで進みながら、私はアギーに言った。アギーも真剣な顔でうなずいた。彼も気付いていたんだ。

その日、私はお屋敷で、2階の寝室と居間を掃除した。1週間のクリスマス休暇前の最後の仕事だ。ホイットフィールドさんは、他のスタッフと同様、休んでいる



あいだ ぶん きゆうきん ほら い ひじょう  
間の分もお給金を払おうと言ってくれた。非常にあり  
がたかった。

ホイットフィールドさんの居間の片隅は、しばらくの  
あいだそうじ ちい かのよう  
間掃除されていなかった。小さな書き物用テーブルに、  
ポケット ばん ほん すうさつはい ちい ほん だな  
版の本が数冊入った小さな本棚がのって  
いた。私は注意深くその周りのほこりを払い、テー  
ブルを拭いていると、本と本のあいだから何かはみ出て  
いるのが見えた。表紙の大きさは合っていないかった。  
本を出してみると、古い10ドル札が5枚、ひらひらと  
ゆか お  
床に落ちた。50ドルだ！

わたし じぶん せいじん い まった  
私は、自分を聖人と言うつもりは全くない。だから、  
そのお金がものすごく大きな誘惑だったと言っても、  
やましくは感じない。ふと、そのお金があれば冬の  
たす おも よぎ  
助かるなあという思いが過った。きっと、そのお金は  
もう何か月もそこにあったのに、だれもきづ  
んだから、わたし と  
私が取ったところで、だれもきづ  
かんが  
かな  
らうなどと考えた。

もちろん、人の物を取るのとは正しい事じゃないと  
わかっていた。でもそのときわたしは、クリスマスプレ  
ゼントを買うお金を貯めるために、ケチケチして細々と  
暮らさなくてもいい全ての金持ちの人達に対して、  
おお いか おぼ はは  
大きな怒りを覚えた。母には、ホイットフィールド  
さんからクリスマス手当をもらったと言えればいい。  
わたし うそ  
私が嘘をついているなんて、絶対に思わないだろう。

とき わたし ひじょう は うそ  
その時、私は非常に恥ずかしくなった。私が嘘をつく  
などは母が決して思わないのは、母が私を信頼して  
はは けつ おも しんらい  
くれているからなのだ。ホイットフィールドさんも、  
ハリスさんも、アデルさんも、私を信頼してくれている。  
もし私がそのお金を盗んだら、私はその信頼を完全に  
うら ぎ  
裏切ることになるのだ。たとえ、だれもきづ  
か  
なかつた  
としてもだ。私はそのお金をにぎると、1階に駆け  
お  
下りて行った。そこではホイットフィールドさんが  
クリスマスのお祝いをする準備をしていた。

「ホイットフィールドさん、これが2階の本の間に  
はさまっていました。」 私は彼女にさっとお札を渡し  
ながら、あわてて言った。それから、家具のほこりを  
はら ほう くに  
払っていたことやら何やらをもぐもぐと口走って、  
彼女がお札を言う間もない内に、さっと走り去った。  
お札は聞きたくなかった。

わたし  
私はもうちょっとのところで、泥棒になる  
どころ  
ところ  
だったのだから。

その日の午後、アギーと私はその月のお給金をもらう  
ためにホイットフィールドさんのところへ行った。そこには  
ハリスさんもいた。

「二人とも、色々たくさん手伝ってくれて、本当に  
ありがとう。」 そう言って、ホイットフィールドさんは  
わたしたち なまえ か きゆうりようぶくろ ひとり ひとり てわた  
私達の名前が書かれた給料袋を1人1人に手渡した。

「それから、あなた達にクリスマスプレゼントもある  
のよ。」 ホイットフィールドさんは満面の笑みを浮かべ  
ながら言った。

ハリスさんは私に、美しい銀のネックレスをくれた。  
それには、透明な茶色の宝石が付いていた。「これは  
こ ほう い じゆえき か せき か  
琥珀と言ってね。樹液が化石化してできたものだ。  
よく見てごらん。中にアギーが入っているんだ。」

「まあ、ありがとうございます！ 世界一キレイで  
す！」 私は興奮して言った。

ハリスさんは、アギーにも紙袋をくれた。「外に  
でたら開けてごらん。」 そう言って、ハリスさんは  
ウインクした。彼の少年っぽいほほえみを見て、弟の  
ヘクターを思い出した。

かえ とちゆう わたし かね と  
帰る途中、私はあのお金を取らなかったことで、  
こころ うれ おも じぶん きづ  
心から嬉しく思っている自分に気付いた。もし私が  
そのお金を盗んでいたなら、彼らがアギーと私にクリ  
スマスプレゼントをくれていた時、私はパニックを  
おこして泣きくずれていただろう。とは言っても、  
としした おとうともうたち  
年下の弟 妹 達にプレゼントを買ってあげるような  
よゆう かが  
余裕がないことには変わらなかった。それを考えると、  
やはり悲しくなった。

とつぜん わたし しこう おどろ さけ ごえ  
突然、私の思考はアギーの驚いた叫び声でかき  
け  
消された。振り向くと、アギーはプレゼントを地面に



落としていた。開いた袋から何が飛び出したと思う？  
2匹のゴム製のヒキガエルだった！あまりにも大きくて  
本物そっくりだったので、私は思わず、以前アギーに  
背中に入れられたカエルの感触を思い出してぎょっと  
してしまった。少しの間、私達はぼうぜんとし、その後  
吹き出してしまった。雪の中で、私達は涙が出るほど  
笑い転げた。それからアギーは2匹のカエルを拾うと、  
声を震わせながら、厳粛な口調で言った。「ぼくは  
このカエルに、テランス2世と命名する。そしてこちら  
には、フェザーリントン2世と命名する。」それは  
うってつけの名前だと、私達の意見は一致した。私達は  
テランスとフェザーリントンを袋に戻し、家に着くまで、  
そのゴムガエルで何ができるかを色々話した。

暖炉の炎と食べ物のおいさと、トロイとヘクターが  
ベッドに入っている屋根裏部屋から聞こえてくる  
キャッキョという笑い声で、私の心の中は暖か  
くなった。私は母と父を抱きしめて言った。「ただいま！  
やっぱり、うちが世界一ね！」

母がほほ笑むと、アギーと私は母に今月の給料を  
渡した。

私達が、鼻がこげそうなほど暖炉のそばに寄って  
手を温めようとしていると、母が、息が止まらな  
ばかりに驚きの声を上げた。

私達が振り返ると、母は、私の給料袋にいつもの

給料以外に、10ドル札が5枚入っているのをなが  
めて、あぜんとしていた。

「一体これって、どういうことなの？」と、母がたず  
ねた。

私だって、信じられなかった。お札には、ホイット  
フィールドさんのきれいな手書きのメモが留めて  
あった。



サウジー様

ここ6か月の間、あなた様の子供達に家で働いて  
もらうことができ、光栄に思っております。二人とも、  
本当に働き者ですね。また、ヘレンさんのこともよく  
知り、彼女が非常に信頼できる方であることもわかり  
ました。

弟のハリスも、こんなに熱心なアリ学者にはお目  
にかかったことがないと申しておりました。研究の助手を  
務めてくれていることを、とても感謝しております。  
同封したものは、休暇手当です。どうか、良いクリ  
スマスをお過ごし下さい。

敬具

ホイットフィールド

母は我に返ると言った。「これは今までで、最高に  
驚きのクリスマスプレゼントだわ！」アギーの目が  
輝いた。「ちょっと待って。ぼくも、ハリスさんから  
もらったクリスマスプレゼントを見せるから！」

お  
終わり

文：松岡陽子 絵：ティアゴ デザイン：ロイ・エバンス  
出版：マイ・ワンダー・スタジオ

Copyright © 2021年、ファミリーインターナショナル

“An Old-fashioned Christmas”--Japanese

関連の読み物はこちら ⇒ 誠実さ、子供のための物語、クリスマス